

Letters

Arpak

レターズアルパック

VOL.209

ISSN 2432-5295

特集
とことん

C O N T E N T S

- ◆特集：【とことん】・・・01
 - ・子どもたちがとことん遊びたくなる「プレイパーク」・・・02
 - ・食品ロス対策をとことん考える・・・03
 - ・路上をとことん使い倒す、ホーチミンのパブリックライフ・・・03
 - ・スラドレッドがとことん好きなスロベニアン・・・04
 - ・マンホールカードをとことん集めてみる・・・04
- ◆今、こんな仕事しています・・・05～08
- ◆新人紹介・・・08
- ◆近況&イベントのお知らせ・・・09～10
- ◆まちかど・・・裏表紙
 - ・高架下プロジェクトが熱い！～阪急高架下&中央線高架下～

(写真) 瑠璃光院 京都市左京区
撮影：中村孝子



特集 よこちゃん

「よこちゃん」は時代遅れの言葉になってしまいました。

よこちゃんまでがんばるのは、いつのまにかカッコ悪いものになってしまったのです。

よこちゃんは物事の終わりのこと。

物事の終わりまで突き詰めるのは、確かにおどろおどろしさを感じるかもしれません。

そこで少し見方を変えて、オノマトペととらえてみました。

「よこちゃん」から「トコトン」へ。

そうすると、トコトンが何ともかわいく見えてきました。

今号はそんな「よこちゃん」をテーマにした小文を集めてみました。

子どもたちがとことん遊びたくなる「プレイパーク」

竹内和巳
地域再生デザイングループ



竹林公園の子どもの広場

プレイパークは、子どもたちが自分たちで自由に考えて遊べる場所です。

遊びは、子どもたちの成長において非常に重要であるとされています。しかし、都市部をはじめとして、子どもたちが自由に遊ぶ空間がなくなることで、子どもたちの遊びも貧しくなっていると指摘されています。皆さんも、禁止事項ばかりが

目立つ、誰も遊んでいない公園を目にすることも多いのではないのでしょうか。

そのような状況において、子どもたちの遊び環境をつくる取り組みとして、日本でも各地でプレイパークが実施されるようになっていきます。

■京都市洛西竹林公園での取組

昨年度、京都市のニュータウンの活性化に関する業務の中で、洛西ニュータウンにある竹林公園内の「子どもの広場」を、安心して自由に子どもを遊ばせることができて、ニュータウン内外から訪れたくなる場所とするために、再整備素案を作成する機会がありました。

再整備素案を作成するプロセスの中で、実際に利用者となる子どもたちや保護者の方を対象とした実験的なプレイパークを実施しました。開催が12月ということもあり、大変寒い中でしたが、子どもたちはダンボールでロボットをつくったり、竹を切って遊んだり、各々がやってみたい遊びを思い切り楽しみました。保護者の皆さんも、子どもたちに負けず劣らず楽しんでいたことも印象的でした。

今回は普段中々できない遊びを用意しましたが、中でも自分で工夫する余地の大きいダンボール遊びの人氣が高く、様々な種類の工作が見られました。また、子どもたちに今後やってみたい遊びを聞いたところ、広場内の高低差や樹木・竹、壁などを使った遊びに関する意見が多く見られました。

遊びができること、が重要だと感じました。また、子どもたちが健やかに育つプレイパークをつくることは、「子育て」しやすいというまちの魅力向上にもつながっていくと感じます。そんな魅力的なプレイパークを継続的に実施できる場をつくるためには、子どもたちがとことん遊べる空間を確保するとともに、大人が無理なくサポートできる仕組みも重要です。今後は、空間と仕組みを合わせて提案していきたいと思っています。



食品ロス対策をとことん考える

長沢弘樹

サステナビリティマネジメントグループ

対象	取組例
事業者間の連携による取組	<ul style="list-style-type: none"> 商品納品期限（1/3ルール）の見直し 品質保持技術の向上による賞味期限の延長 気象予測を活用した、発注システム構築
事業者と市民・NPO・行政等との連携・協働	<ul style="list-style-type: none"> フードバンクへの寄付等による有効活用 「食べきり運動」「持ち帰りの呼びかけ」による外食産業の食ロス削減 使い切りレシピの公表やコンテスト実施

※食品ロス対策の先進的取組例



側の小売・外食や家庭にはなかなか普及

これはもつたないといふことで、これまでも分別排出によるリサイクル等の取組が多数行われてきました。しかし、分別等の手間が大きいため、長年の努力にもかかわらず、特に川下

当社がごみをとことん調査することで知られていますが、その結果を見ても、家庭の可燃ごみで最も多いのが食品廃棄物で、そのうち約2割が「手つかず食品※」です。地域差も大きいですが、以前に比べ、加工食品やパッケージ入り食品の割合が高まっています。

農水省の調査結果によると、全国の食品ロス量は平成27年度で約646万トンと推計され、国民1人当たりで換算すると、毎日茶碗約一杯分の食べ物が捨てられているといえます。

まだ食べられるのに捨てられている食べ物、いわゆる「食品ロス」対策の取組が広がっています。

※家庭系可燃ごみ中の手つかず食品（長岡京市での調査結果）

実証など、様々な形で食品廃棄物対策に取り組んできました。今後、これまでの調査研究等の蓄積を活かし、更に幅広い事業にとことん取り組む所存です。

※「手つかず食品」と「食品ロス」は基本的に同じですが、調理時に過剰に切除された部分の扱いなど、一部異なります。

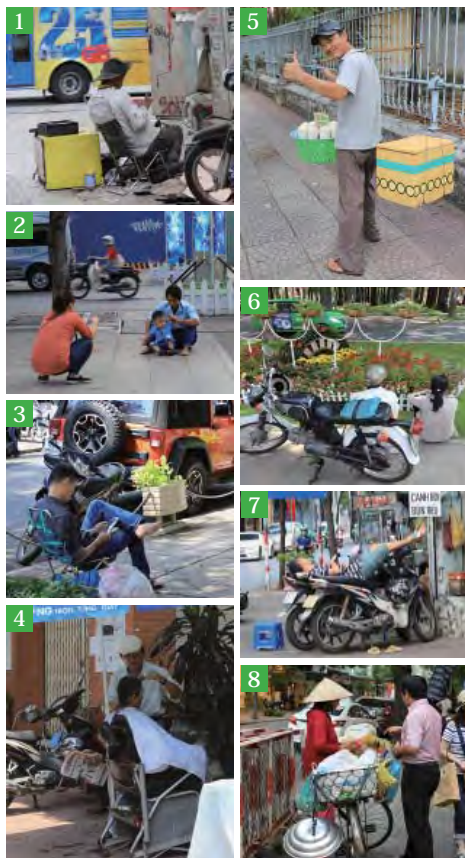
このように、長らく停滞していた食品ロス対策ですが、近年、これまでと違う新たな取組が増えていきます。以前は、小売や食品製造業者の食品廃棄物を、リサイクル事業者がたい肥や飼料に加工するといった分業型のリサイクルが中心でしたが、近年は表に示すように、事業者間の連携、あるいは市民・NPO・行政等との連携により、また3Rの原則にも従い、「リデュース（減量）」に取り組む事例が増えています。特に未利用食品を福祉施設・団体に活用する「フードバンク」のような、「環境問題の解決が社会的・経済的な課題解決にもなる」という国連サミットで採択されたSDGsの精神を反映したこれまでにない取組が増えてきているのが特徴です。

当社は、従前から自治体等の委託で食品ロスを対象とした各種調査研究や啓発事業等のほか、事業者と連携した量り売り

路上をとことん使い倒す、ホーチミンのパブリックライフ

坂井信行

都市・地域プランニンググループ



ホーチミンでは素敵なパブリックライフのシーンをたくさん見つけました。そのうちのいくつかをご紹介します。

ベトナムのホーチミンは北緯10度のまち、北緯34度の大阪や35度の東京との差は20度以上です。日本の都市は緯度のわりに暑いですが、ホーチミンは緯度なりに暑いです。5月の連休中にホーチミンを訪れました。乾季から雨季に変わるこの季節が一年のうちで最も暑いそうです。

そんな暑い都市ホーチミン、過ごし方として、路上などの屋外空間をとことん使い倒す、パブリックライフのスタイルがあります。熱がこもる建物の中にいるより、風が抜ける路上に出てきて過ごそう、ということでしょうか。熱中症を避けて涼しい建物の中に避難する日本とは真逆のアプローチといえます。

- ① 私靴磨き。サボってるんじゃないよ、客が来ないんだって。
- ② 靴を脱いで、ハイチーズ!
- ③ ストリートじゃスマホのチェックも快適さ。
- ④ 散髪だつてやつちゃうよ。
- ⑤ 暑いでしょ、ココナッツジュースあるよ。
- ⑥ 若い2人には希望の未来とバイクがある!
- ⑦ バイクを2台並べれば昼寝のベッドになります。
- ⑧ 男「えつと、これとこれをちやうだい」、女「お客さん、お目が高いわね」
- ⑨ あつ、ちよつと電話。
- ⑩ おじさんたち4人。悪巧みしてるわけじゃないからね。

スラドレッドがとことん好きなスロベニア

岡崎まり
地域再生デザイングループ



街中に出現したスラドレッド屋さん

4月に入り春らしい陽気となったスロベニアの首都リュブリャナでは、中心地であるプレシエレン広場周辺にアイスクリームの露店が出現するようになりました。

スロベニア語でアイスクリームはスラドレッド (sladolec) と呼ぶのですが、とにかくスロベニア人は老若男女関係なくスラドレッドが大好き！すれ違う人が何かを食べているなど見てみると、リングゴカスラドレッドであることが多いです。

公共施設や個店の入り口にあるピクトグラムにはスラドレッドの持ち込み禁止のマークがよく表示されています。飲食禁止のマークと並んでスラドレッドの持ち込み禁止のマークがあるお店もあり、とことんスラドレッド

ドが大好きなお国柄を感じます。お店の前でスラドレッドを急いで頬張る人たちもチラホラ見かけ、暑い日の風物詩の1つといえます。

私が子どもとよく行く公園の近くにもスラドレッド屋さんがあるのですが、美味しいのはもちろんのこと、1€で食べることでできる手軽さも大きな魅力となっています。スーパーで売られているものと値段は変わらないし、ワンコインで買えるならとついついお財布の紐が緩んでしまおう今日この頃です。



スラドレッドのピクトグラム

(続) デザインマンホールにハートがずっきゅーん！マンホールカードをとことん集めてみる

中村孝子
企画政策推進室



丸亀市 (裏面)

最近、友人や職場の先輩からマンホールカードをもらう機会があります。カードの存在は知っていましたが、全国に点在しているのと平日配布のところがありチャレンジするのを断念していました。しかし、実物を手にすると収集欲に火がついてしまいました。カードの表面には、マンホールの蓋の写真、所在地の市町村名、設置されている位置座標、31種類のテーマピクトグラム。裏面には、設置開始年、デザインの由来や説明文、デザインに関連する画像やイラストなどの情報が満載です。私はついにバンドラの箱を開けてしまいました。

さて、このマンホールカード、国土交通省や全国の自治体、下水道の関連団体などにより設立された下水道の活動を広報する「下水道広報プラットホーム(略称GKP)」が、企画・運営しています。2016年4月の第



大津市のピクトグラム：花、木、鳥、乗物、橋、湖、イベント、キャラクター

1弾導入から2年で早くも第7弾となり、現在、全国301団体342種類ものカードがあります。

カードは無料で定められた配布所で受け取り、窓口では簡単なアンケートを記入します。基本的には、訪問日、どこから来たか(県内、県外)、年齢、性別、人数ですが、中には、カードを何で知ったか、当地に来た目的、他に行く場所などを記入する場合があります。窓口によっては、カードを渡すだけでなく、カラーマンホールの設置場所、周辺の観光マップの配布や観光のアドバイスもしてくれます。

集めてみるとデザインには、ゆるキャラ(ひこにゃん・彦根市)、アニメのキャラクター(名探偵コナン・鳥取県北栄町)、球団マスコット(カープ坊や・広島市)などもあり、他のマニアも喜びそうなものまであります。

下水道といえば一見、地味なイメージを持ちがちですが、マンホールを通して、地域を訪れ知る、歩く楽しさが倍増するなどその役割は大きいと思います。これからもとことん足を運び、集めてみようと思います。

臨濟宗大本山妙心寺の総合防災事業が完成しました

高坂憲治：

建築プランニング・デザイングループ



中心伽藍放水銃試験放水

3月8日、京都市右京区花園に位置する臨濟宗大本山妙心寺の総合防災事業が完成し、厳かに落慶法要が営まれました。

妙心寺は、大方丈、小方丈、大庫裏、法堂、仏殿、山門、勅使門の国指定重要文化財を中心伽藍として、その周囲に38の塔頭寺院を配置した大寺院です。山内全体が史跡に指定され、多くの塔頭が国や京都府の重要文化財や名勝に指定されています。

この妙心寺の総合防災事業は、平成22～23年度に実施された防災事業の基本方針を検討する調査計画に始まります。調査計画の実施にあたっては、調査委員会を組織し、学識経験者の委員の先生方をはじめ、文化庁、京都府、京都市の方々から、多大なるご指導、ご助言を受けました。調査の中で特に印象に残っている



妙心寺中心伽藍

のは、妙心寺周辺にお住まいの方々へのアンケートの中で、地域の方々が、妙心寺山内全域を、優れた居住環境と捉えられていることでした。妙心寺の文化的価値と共に、緑やオープンスペースを、地域の憩いの場として、誇りに思う姿が浮かび上がりました。同時に多くの方が、妙心寺を災害から守る必要性を感じていることが明らかになりました。

一方、妙心寺山内の塔頭へのアンケートでは、災害時の避難場所として、「塔頭を提供できる」という回答が多く、提供可能な部屋は、畳数にして実に1300畳にも及ぶこともわかりました。

このように、地域にしっかりと根を下ろしている妙心寺の山域は、実に31ヘクタールに及ぶ広大な面積を有していることから、妙心寺の文化財防災は「点の防災から面の防災へ」、すなわち妙心寺を一つの街として捉え、「街全体の防災」をコン

セプトといたしました。

まず、はじめに街の防災として、誰でも初期消火に参加できるように、各塔頭の門の近くに、消火栓を設置することを第一のルールとしました。山内を六つのブロックに分け、既に整備されている貯水槽一基を含み、総水量3000トンに及ぶ五つの貯水槽・ポンプ室を整備し、山内すべての塔頭に、総数119基の消火栓を今回設置いたしました。そのための送水管の総延長はおよそ6000メートルにも及んでいます。

また、周辺からの類焼を防ぐために、特に類焼リスクが高いと判断される箇所には、延焼防止用の放水ノズルを設置して延焼防止ラインを構成しています。

妙心寺は南北約600メートル、東西約500メートルの広大な山域の中に、38の塔頭が建ち並ぶことから、災害時の情報伝達と共有を迅速に行うために、すべての塔頭に火災報知器を設置し、光通信を用いて全山の火災情報を本山が把握し、かつ周辺の必要な塔頭に、火災情報を知らせることができ、火災報知設備を設置しました。

工事は平成25年から足かけ5年に及び、本事業にあわせて妙心寺の長年の懸案事項でありました「電線類の地中化」を同時に実施いたしました。



延焼防止ライン試験放水



塔頭消火栓

その結果、妙心寺の安全・安心を地下で支えつつ、美しい空の景観が蘇りました。また、防災工事、電線類地中化工事をご担当いただきました工事関係者の皆様には、複雑なパズルのような工程を見事に調整し、無事故で完成していただきました。全山が史跡である山内での掘削工事は、埋蔵文化財の調査や妙心寺の象徴である松の木の保全など様々な難題があり、一つ一つ丁寧に乗り越えていただきました。

現在、妙心寺では、山内の防災計画策定に取り組んでいます。本事業において整備した、ハードを動かすソフトの整備です。

今回の妙心寺の総合防災事業は、そのほとんどが地中にありますが、各塔頭の門の横をはじめとして、山内に密やかに設置された消火栓や放水銃が、妙心寺山内を、そして数多くの文化財を、火災から守る新たな景観となることを調査計画、設計監理に携わった者として心から願っています。

農家といっしょに、府民や事業者が大阪の農空間を保全・活用できます！

「おおさか農空間づくりプラットフォーム」が開設されました。

原田弘之：

地域産業イノベーショングループ

3月に大阪都心のうめきた広場で、約120名の農家、府民、事業者等が集まり「おおさか農空間づくりプラットフォーム・キックオフイベント」が開催されました。

大阪の都市部周辺には、農地、集落、里山、ため池などの農空間が広がっており、それらは農業生産の役割以外に、環境保全、防災、学習、健康など多面的な機能を持っています。しかし、その一方で担い手の減少・高齢化、耕作放棄地の増加など、様々な課題を抱えています。

大阪府では、これらの課題を解決するために、地元の農家団体と、農空間に関わりたい府民、企業等が出会い、交流し、活動を生み出す「おおさか農空間づくりプラットフォーム（愛称：ふらつと農楽里）」を開設しました。

今後、登録会員を増やし、農空間の現場での活動に限らず、都市部でのマルシェや試食会、交流会などの取組が発生していくことが期待されます。特に、巨大な消費マーケットを近くに抱え、元気な事業者が多い大阪では、事業者の農空間への関わりが望まれます。また、「農空間×事業者」がwin-win



農家、府民、事業者が集まり開設の記念写真

となるような健康、美容、医療、商品開発、農福連携、ICT、ドローンなどの視点での活用や、CSR、CSV、福利厚生、研修、お客様へのもてなしやサービスの場としての利用も考えられます。プラットフォーム会員どうしの出会いとともに、事務局の営業やマッチングの力が試されます。「おおさか農空間PF」で検索してみてください。

*本業務は地域産業イノベーショングループの武藤も担当しています。

空き家の流通促進に向けた民間事業者によるプラットフォームが立ち上がります！

橋本晋輔：

都市・地域プランニンググループ

全国的に空き家の増加が問題になっていますが、それぞれの建物が空き家になっている要因は様々です。

「建物が劣化しており、どう活用できるのか分からない」、「どれだけ投資すれば、買い手がつくのか分からないので放置している」、「権利関係が複雑になっており売却できない」などそれぞれの要因に対して解決策を示し、それまで市場に流通していなかった空き家を流通させることが、空き家の解消には必要です。しかし、どの物件オーナーが空き家を活用したいと思っているのか、何に困っているのかといった情報は、不動産事業者や建築士など具体的な解決策を提示できる民間の専門事業者のところにはなかなか届きません。

奈良県生駒市では、オーナーの活用意向がある物件に対して、専門事業者が流通に向けて対応できるように、専門事業者のプラットフォームの構築に向けて検討を進めてきました。プラットフォームは、市が保有している空き家の所有者情報等を、宅地建物取引士、建築士、司法書士、空き家関連NPOなどにより構成される組織に対して提供することで、専門事業者が連携して空き家の流通促進に向けた方策を検討し、オーナーに提案できるように、市と専門事業者がwin-winになる仕組みとなっています。国のモデル事業である「空き家所有者情報提供による空き家利活用推進事業」に採択され、仕組みの検討を進めてきました。

今年6月にはプラットフォームが立ち上がり、具体的な物件に対応していく予定です。これまで流通していない物件を対象とするので、流通に向けたハードルが高い物件も多くなると想定されますが、民間事業者主体でどこまで対応するのか、このプラットフォームの役割が何なのかを常に考えながら進めていく必要があると思います。この取り組みが民間主体での空き家活用のモデルとなることを期待しています。



産地が学生を育て、学生が産地を発信！

京都洛西・大原野×名門私立高校

武藤健司：

地域産業イノベーショングループ



地域住民を中心に構成する「なんやかんや」「大原野」推進協議会では、昨年度から農業体験イベントを企画・開催しています。イベントでは、収穫や植え付け体験に加えて、ドローンの操縦体験、焼き芋や竹箸づくり、畑でのバーベキューを行うなど、農や食を通じた体験プログラムづくりにチャレンジし、アルパックはこの企画運営を支援しました。

この取組を通じて、洛星高校料理研究部の顧問の先生とお会いする機会があり、「筍掘り体験」という形で第1弾として交流が実現しました。洛星高校料理研究部は、料理やお菓子づくりやメニュー開発をはじめ、京都の食文化の学習、菜園活動、全国の料理大会への出場など活発な活動をされています。

当日（5月13日）は14名の生徒が、生産者指導のもと筍の収穫体験に挑戦。雨に見舞われましたが、みなさん一生懸命に筍を掘り、午後は早速調理をするなど楽しんでいただきました。

協議会では、料理研究部の活動に生かしていただけるよう、生産や食材の特徴を伝えました。①生産の特徴として、柔



らかくおいしい筍を作るためには、年間を通じた畑の管理（ハードウーク）が必要なこと、担い手の高齢化が進んでいること。②食材の特徴として、筍は、”旬”が売りであること。また、あく抜きなどの調理負担が大きいく、若い世代を中心に料理されにくい食材であることなどを生産者からお伝えしました。さらに、昼食は地元加工グループによる筍ご飯弁当、インスタグラムも活用した魅力写真コンテスト、大原野地域の魅力紹介など、工夫を凝らした企画となりました。

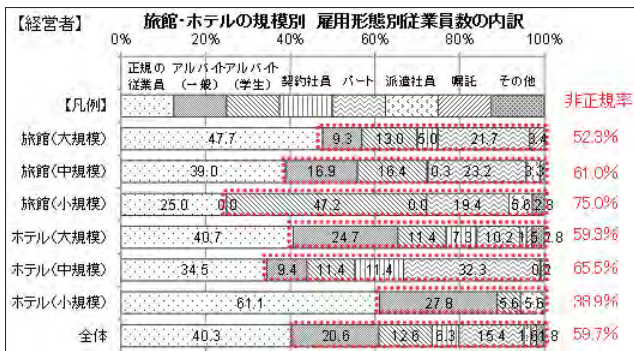
大原野地域で積み重ねてきた活動は、高校生の学びの場となり、さらには産地を発信する料理へと形を変えるなど、着実に、実を結び始めています。

*本業務は地域産業イノベーショングループの原田弘之、地域再生デザイングループの石井努も担当しています。

京都市の宿泊業における雇用の安定に向けた調査研究から

江藤慎介：

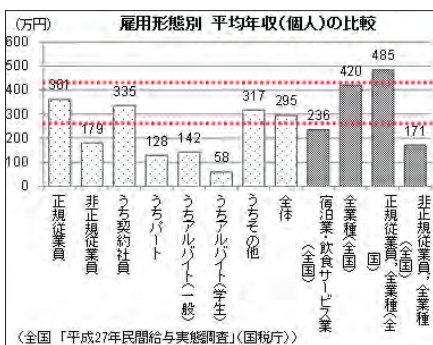
地域産業イノベーショングループ



「働き方改革」が叫ばれる中、地域経済を牽引する旅館・ホテル業界においては、従業員の非正規率の高さ、及び労働生産性の低さが問題視されています。

誰もが働きやすい職場環境を整え、「おもてなし」に精通した様々な能力を持つ担い手の育成に取り組むため、アルパックは平成28年度に京都市及び（一財）地方自治研究機構と共同で「宿泊業における雇用の安定に向けた調査研究」として、京都市における働き手と事業者双方から雇用の実態とニーズを調査しました。

調査の結果、市内旅館・ホテルの非正規率は約60%と全国並みであり、平均年収（個人）は295万円が全国より高いにも



関わらず、正規従業員よりも非正規従業員のほうが満足度が高い結果となりました。また、有給休暇を全く取得していない従業員が5割、育児（介護）休暇対象者にも関わらず取得していない従業員は9割となっており、現在の働き方に不満足傾向を示す従業員は長時間労働や有休等未取得の傾向にあることも分かりました。

さらに人手不足の昨今において、旅館・ホテル業界においても過半数で従業員の不足感があることが分かりました。このため、約6割の宿泊施設で正規雇用・正社員転換を実施するとともに、複数の業務を担える従業員の育成や、正社員転換による意識向上の取組が進められています。近年は働き方の多様化、キャリアの多元化が指摘されており、宿泊業の担い手確保・育成についても、同様の視点を持つ取組も必要だと考えられます。

上山高原で「べっぴんさん」の茅の出荷が本格スタート

駒和磨：

サステナビリティマネジメントグループ



初めて山焼きを体験する地元の子供達



職人さんの指導を受け、茅の出荷に向けて束ね直し作業を行う

今後の活動に対してより一層のやる気を出されています。しかし、ススキをただ刈るだけでは、「べっぴんさん」と呼ばれる茅はできません。上山高原では、毎年4月の、「上山高原山開き・山焼き」や但馬牛の放牧などの多種多様な管理を行うことで、灌木・ササの侵入を防ぎ、「べっぴんさん」の茅ができるススキ草原を維持しています。

ススキ草原は、イヌワシをはじめとする希少な生態系の一部のみならず、地域の観光資源、茅葺屋根用の茅の供給、地域の特産品としても、重要な資源となっています。「自然を保全する」という活動が、「ただの作業」ではなく、本来の里山と人間との関係の様に、「暮らしていくための活動」となるように、今後とも取り組みを継続していきたいです。*本業務は、サステナビリティマネジメントグループの畑中直樹、中川貴美子も担当しています。

上山高原エコミュージアムでは、再生したススキ草原で刈ったススキを茅としての活用が進められています。上山高原は、自然再生の取組開始から17年が経過し、平成29年度には、約40ヘクタールものススキ草原が回復しています。今後、さらなる地域の自然資源の活用を為、平成29年度5月に神戸市の「淡河かやぶき屋根保存会くさかんむり」と「NPO法人上山高原エコミュージアム」が、ススキ草原と茅葺き文化の維持・継承を目指し、連携協力しあうことを目的とした協定を結びました。そうした中で、昨年度から、刈り取ったススキを茅葺き用の茅として利用するプロジェクトが始まりました。上山高原の方と上山高原の茅を使用している神戸市の茅の葺き替え現場の視察の際には、茅葺き職人の方から「上山高原の茅は、真っ直ぐ、しなやかで、べっぴんさん」とお聞きし、皆さん、



視察現場で熱心に屋根の上まで登る上山高原の人々

新人紹介

多角的な視点を持って



山道未貴
地域再生デザイングループ

4 月より大阪事務所、地域再生デザイングループに配属となりました山道未貴です。生まれも育ちも熊本県で、のんびりと育ってきました。入社を機に、初めての一人暮らしがスタートし悪戦苦闘の毎日ですが、慌ただしい人や時間の流れに飲み込まれないように自分を持つていきたいなと思っています。大阪初心者なので、まずは土地勘を養っていくためにも色々な地域を歩いて見て回りたいです。大学では、農村計画を学び、まち歩きを通じて地域の構造を読み解いたり、地域の生業から景観の成り立ちを理解したり、現場で学び考える機会が多くありました。また研究室の活動では、農山村地域をフィールドに、地域住民とともに地域の魅力を発掘し、地域が抱えている課題を見出し、少しでも解決できるような活動に取り組んできました。これまでの活動を通して、地域づくりはとて時間がかかることで、小さな小さな活動の積み重ねが結果的に大きな力に変わっていくことを学びました。また、一昨年発生した熊本地震は自分の中でも大きな経験となり災害復興に携わっていききたいと思う気持ちが強くなりました。

まちづくりには、様々な視点や知識が必要のため、頭でっかちな考え方にならないよう、多様な角度から総合的に学び、その中から私の専門領域を築き上げていきたいと思っています。住民の思いを丁寧に拾い上げ、地域の課題や特徴を見出し、地元に寄り添ったまちづくりが実現できるように頑張ります。今年も新入社員が一人で寂しさや不安でいっぱいですが、頼れる先輩方から一つ一つ学び、スポンジのようになら吸収していきたいと思っています。どうぞよろしくお願ひ致します。

関西文化学術研究都市への想い 愛するふるさとのために持続可能なまちづくりを

三輪泰司
名誉会長

学研アーカイブ完成

「学研アーカイブ」整理作業が終わりました。3月22日、国立国会図書館関西館で、同図書館への寄贈契約調印が行われました。

1977年に始まった関西文化学術研究都市の構想から推進への「記録」を整理し、次世代のために伝承することは、私たちの責任であり、特権でもありました。去り行く「伝承者」は、初動期の資料に未来へのメッセージを埋め込んでいます。「重要文献」と特記した資料です。

その1つは、1980年9月、山城青年会議所主催「明るい豊かな地域づくりと関西文化学術研究都市構想・シンポジウム」の記録です。もう1つは、用途規制を決めた資料です。いわゆる2・4・6方式と称し、大土地所有者に住宅地開発と引き換えに、研究施設のための用地提供を指定した文書です。

関西学研都市は、東の筑波と並ぶイノベーションセンターですが、特長は、居住との一体性と、12ものクラスターから構成されていることです。

関西学研都市30年。由緒ある相楽・木津、綴喜・田辺、

奈良、生駒等々、大阪・京都から風が吹き込み、ここをふるさととする人びとが育つことを想像していました。都市形成への規範を用意しました。そうやってきました。“ジモト”に根を下ろし、信頼を培ってきた世代が主役になって、地域に根差した都市づくりへ踏み出してきました。想いを共にする「けいはんな都市クラブ」の歩みは20年を超えました。

暮らしの息吹あふれる「ダウンタウン」と研究施設群を中心とするアップタウンを結ぶ、活発な域内交通が走り廻る様子を想像しています。



調印する後藤邦夫先生 / 後は資料の一部

共同の福祉とは実利と安心 動かすのは、奉仕のこころと冷静な実務

三輪泰司
名誉会長

他者への奉仕

昨年11月30日、26年の歴史に幕を閉じ、建築士事務所厚生年金基金が解散。12月1日「建築士事務所企業年金基金」が発足しました(写真:基金だより最終62号)。

隠岐で「地域」を見つめていた私達は“過疎”そして出生減少による“第二の過疎”、そして高齢社会へと続くことは分かっていました。アルパック創業2年目でした。翌3年目に京都中小企業家同友会創立。自身が資本金150万の零細企業。中小企業支援への奉仕が社長・会長の職責になりました。

高度経済成長の中、営業に力を注ぎましたが、それだけで社員の福祉は守れるか。議論し摸索しました。創立25周年にもなると、賢くなりました。一步踏み出しました。

「建築士事務所厚生年金基金」は、1992年(平成3年4月)、既にあった東京・大阪以外の地域を対象に、日本建築事務所連合会(日事連)と日本建築家協会(JIA)が共同して設立しました。JIA千葉の鶴巻昭二さんがキーパーソンでした。

年金、即ち福祉の世界にも小さくない「格差」があります。最低は零細自営業者。いわゆる1階の国民年金だけ。

2階は厚生年金。3階には「年金基金」と公務員・教員などの共済。大企業の共済はもっと豊かです。病院や保養所まで持っています。年金基金の掛金は全額企業負担。利益留保にもなる。給付を受けるのは退職者ですから、現役の社員は存在にも気づかないものです。

第10期(2010年)から高坂取締役が理事を勤めました。理事はその都度上京し、資金運用はじめ経営を監督します。立派な建築家の方々がほぼ無報酬。つまり時間・労力にお金まで費やしてのご奉仕です。報酬は会計・財務・経営の知識とスキルを獲得すること。

自分の社員と仲間たちの老後の安心へ、共同の福祉を闘いとするのは「他者への奉仕の精神」です。



日本とベトナム、良き隣人としての未来をめざす ～ベトナム企業視察の感想を踏まえて～

杉原五郎
代表取締役会長

本年2月のベトナム視察ツアーには、中小企業経営者、大学関係者、弁護士など「アジア中小企業協力機構(ICOSA)」のメンバー15名の一人として参加しました。ベトナムでは、日系企業、現地企業、ホーチミン市工業大学、職業訓練学校、技能実習生訓練校、ドンズー日本語学校、工業団地などを視察し、関係者と懇談、意見交換をしました。今回の視察を通じて、私は以下の3点が印象に残りました。

第1に、日本とベトナムが大変近い存在であること

日本とベトナムの両国は、経済的な面だけでなく、文化や人的交流の面でも結びつきが大変親密であることを実感しました。毎年、多くのベトナムの若者が実習生や留学生として来日し、ものづくりの技術などを学び、日本文化に触れています。同時に、現地には日系企業やローカル企業の幹部として活躍している日本人が多数いることもわかりました。

第2に、日本の中小企業とベトナムの中小企業の間で、相互補完の良好な関係が構築されつつあること

日本は、人材不足などの理由でしっかりした高い技術を有しながら多くの企業が廃業の危機に直面しています。一方、ベトナムでは、技術、品質、生産内容で劣るもの、若くて意欲的な人々が多数いて日本に学ぼうとする積極的な姿勢があります。日本とベトナムがそれぞれの強みと課題

を相互補完しながら、良好な関係が構築されつつあります。第3に、ベトナムでは、高速道路の整備、近代的なビル建設が進む一方、交通問題や都市問題が顕在化しつつあること

今回の視察では、街や地域をつぶさに見て回ることはできませんでしたが、高速道路の整備が進み、瀟洒な高層オフィスやマンションが建ち並び、経済成長が著しいことも実感しました。広い通りの中央分離帯には、緑豊かな樹木が植栽され、道路が交差するロータリーには色とりどりの花が植えられていて、日本以上に美しい景観に驚きました。同時に、前回訪れた10数年前と比較して、相変わらずバイクが街中にあふれる中で、クルマが飛躍的に増加し、交通渋滞の頻発、交通事故の多発、大気汚染の進行など、交通問題が顕在化しています。鉄道やバスなど公共交通の整備、歩行者空間の充実が急務と痛感しました。鉄道建設などインフラ整備などハードだけでなく、水処理、環境対策、中小企業支援、まちづくり、人づくりなど、ソフト面においても日本の果たす役割が大きいと思われました。



ホーチミン市内の交通混雑状況

シンポジウム「スポーツ産業による関西の活性化」 6月30日(土) 梅田で開催

高田剛司：
地域産業イノベーショングループ

(一社)日本計画行政学会関西支部(事務局:アルパック)が主催するシンポジウムの今年のテーマは「スポーツ産業による関西の活性化」です。

関西には、アシックス、ミズノなど有名スポーツ用品メーカーが集積し、また、聖地・甲子園や花園があるほか、野球やサッカー、ラグビー、バレー、バスケットなどプロスポーツが盛んです。多くのスポーツ人材を輩出し、スポーツに関する歴史・文化の層が厚い地域といえるでしょう。

今後は、ラグビーワールドカップ(2019年)、東京オリンピック・パラリンピック(2020年)、関西ワールドマスターズゲームズ(2021年)と大規模な国際スポーツイベントが続きます。こうしたことを踏まえ、本シンポジウムは、スポーツに関する製品イノベーションやスポーツビジネスの強み、地域貢献のあり方やめざすべき方向性など、今後、関西でスポーツ産業を振興していく方途について議論する予定です。

午前中は学会員による自由テーマの研究報告があり、

午後からシンポジウムが開催されます。午前・午後ともに、学会員でない方も参加できますので、関心をお持ちの方はぜひお越しください。

なお、詳細は、関西支部HPをご覧ください。

<http://japa-kansai.kir.jp/event.html>

■日時：平成30年6月30日(土) 10:00～17:00
(受付開始 9:45～)

■場所：龍谷大学 大阪梅田キャンパス

■参加費：1,000円(当日、会場でお支払いください)

■概要：

(午前) 研究報告

(午後) 基調報告 植田真司氏(大阪成蹊大学教授)

パネルディスカッション

・植田真司氏(大阪成蹊大学教授)

・庄子博人氏(同志社大学助教)

・吉澤正登氏(一般社団法人FC大阪スポーツクラブ会長)

・加藤恵正氏(兵庫県立大学大学院教授)

※コーディネーター


 嶋崎雅嘉：
地域再生デザイングループ


高架下プロジェクトが熱い！

〜阪急高架下&中央線高架下〜

私の家の最寄り駅である阪急京都線「洛西口駅」は平成28年度に上下線とも高架化され、生み出された高架下の空間を活用した「洛西口〜桂駅間プロジェクト」が進められようとしています。

平成30〜から平成32年度まで随時、「地域交流」「子育て」「文化」「観光」「健康・防災」のまちづくりテーマに基づく施設が整備される予定で、近隣住民としてもどのようなまちとなっていくのかワクワクしています。

このような高架下のまちづくりは全国的に増えてきているようで、先日、出張の際にJR中央線の高架下「ののち」を見学しました。



5人のクリエイターなど小規模事業者が入る「アトリエ・テンポ」

「ののち」は武蔵境駅（武蔵野市）〜東小金井駅（小金井市）の間をつなぐ高架下空間に、商業、保育園、クリニックなどの生活サポート施設、地域の交流・回遊拠点として「コミュニティステーション」、広場空間の「コミュニティガーデン」などが整備され高架下空間が一体となって地域の魅力アップに貢献しています。

残念ながら、訪問した水曜日は定休日のお店などが多く、賑わっている雰囲気味わったり、関係者、利用者のお話を聞くことはできなかつたのですが、地域共創型の商業施設として企画されたコミュニティステーション東小金井の展開が面白そうです。

施設には、クリエイターなどの5人の小規模事業者が入る「アトリエ・テンポ」や、全国のフリーペーパーを集めたライブラリーを併設した企画展示スペース「ヒガコプレイス」などが入っています。

コミュニティステーション東小金井は商業施設ですが、店舗をセッ

トバックして生まれた空間や、カフェに併設された広場等を使って、地域と連携したイベント（家族の文化祭）なども開催されているとのこと。

駅中心の開発による集客と波及効果とはひと味違い、高架下のまちづくりは、駅と駅の間をつなぐことによる「まちとのつながりやすさ」を感じます。

洛西口〜桂駅間プロジェクトも、周囲の町とのつながりの中で楽しく過ごせる空間となることを祈っています。

ヒガコプレイスHP
<http://www.higako-place.jp/shop/higako-place/>



フリーペーパーが自由に閲覧できるライブラリ（ヒガコプレイス）



「レターズアルパック」は、ホームページからもご覧いただけます。

アルパック (株) 地域計画建築研究所

Architects Regional Planners & Associates・Kyoto
<http://www.arpak.co.jp> E-mail: info@arpak.co.jp

本社・

京都事務所 〒600-8007 京都市下京区四条通高倉西入立売西町82 TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

大阪事務所 〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7 日本生命今橋ビル10F TEL(06)6205-3600 FAX(06)6205-3601

名古屋事務所 〒450-0003 名古屋市市中村区名駅南1-27-2 日本生命笹島ビル17F TEL(052)462-1030 FAX(052)462-1061

東京事務所 〒102-0074 東京都千代田区九段南3-5-11 スクエア九段ビル1F TEL(03)3288-0240 FAX(03)3288-0221

九州事務所 〒810-0802 (株)よかネット:福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128



この用紙は「びわ湖の森を元気にする」
Kikitoペーパーを使用しています。